

## 教え、育むこととは

元中学校教員，秋田県教育カウンセラー協会会員

加藤 眞理子

20世紀の代表人物\*①アインシュタインの著書に「教育とは、学校で習った知識をすべて忘れた後に、それでも残っているところのものを育てることである」という言葉があります。残るものとは何か？そうしたものを子供たちに与え育てているのか？を自問しつつ、授業に取り組んでいくことが課題だと思います。

### 【死生教育】

ヒトは、すべて死ぬべき運命にある、例外はないからこそ、どう生きかが問われることを自覚させた上で、病気であっても老いても、生きているだけで価値や意味があるのだという、人間の尊厳やいのちの大切さを納得する・させることが必須です。

### 【比較の価値の撤廃】

学校は“社会の縮図”であり、義務教育時代から競争社会に投げ込まれ、容姿や能力、持ち物など比較の価値をもつ。コンプレックスは、引け目や自信のなさ、他者に向かえば妬みやいじめに変質していく類のものです。

死に向き合って初めて、社会的立場や財産、才能が役立つわけでもないと悟るのでは、遅い！

日頃から、自分自身や自分の人生を肯定する感情をもち、そして、心安らかに目を閉じたいものです。

### 【生きる喜び】

死に対して、どうせ死んでしまうんだから・・・と\*②欲望のままに生きるか、永遠に生きる苦しみがなくていい有限性に安堵するかは、個別です。が私は、悩める相談者へ「どんな生きものにも、生きる喜びがある」（昆虫学者ファーブル）の言葉を引用し、生きることに目を向けさせます。

人生には、理不尽な苦しみや解決できない辛さがつきまとうことを覚悟し、そこから学ぶ姿勢が、よく生きることに繋がると考えます。人間には、\*③選択する自由が与えられているので、熟考し最善を尽くすことこそ、自分らしく生きることでしょう。

### 【非日常と日常】

病気が死と結びつくようになったのは19世紀からで、それ以前は、貧困や飢え、戦争や事故、死刑、ペストの流行が因果でした（ミシェル・フーコー）。思惑を超える非日常に遭遇して初めて、日常の幸せに気付くのではなく、当たり前の日常を有り難しと感じる感性を養うことが、大事です。

非日常での行動力や即効性・折れない心、日常の感謝の念のバランスが大切です。あらゆることが起きるのを前提にしていれば、許容する寛容さが生まれます。

他者への関心や相互扶助の思いやりを育むことも、将来に亘って必要でしょう。

### 【ウエルビーイング（幸せや健康）】

学習指導要領も幼小中高まで「主体的・対話的で、深い学び」を中心とした学び方に变化しつつあります。

日本の経営者が「全社員の物心両面の幸福を量産するのが使命」と言う、経営学の変化と同様、幸せになるための学びが求められる時代に移行していくでしょう。

どういう考え方や生き方をすると、ワクワク楽しい思いで、元気にエネルギーを遣えるか？ストレスを避け、自分の心を傷つけず、心の平安を第一義にすることが、加齢とともに一層望まれる生涯教育になり得ます。

\*①天才的な科学者・哲学者・平和活動の推進者

\*②「外食して美味しいものを食べたい」は「点滴や胃瘻でなく、自分の歯で食べたい」、「海外旅行へ出かけたい」は「自分の足でトイレへ行きたい」と、欲望は変化する。

\*③絶対後悔しない正しい選択だったかは、何年も経たないと判断できないことがある。ゆえに、「人事を尽くして、天命を待つ」心境で生き、委ねる。